

## 霧島山火山災害予測図利用上の留意事項

この予測図は、霧島火山防災検討委員会（平成 19 年度）による火山災害予測図検討分科会の成果に基づき、次の 2 つの規模の噴火による影響範囲を示しています。

### ① 規模の小さな噴火（20 年に 1 回程度起きるような噴火）

火口のそばでは、噴石が飛んでくるため危険です。

- 1991 年（平成 3 年）11 月 13 日に新燃岳直下で地震が急増し、11 月～翌年 2 月まで時々火山灰が噴出し、火口近傍に積りました。
- 1959 年（昭和 35 年）2 月 17 日に、新燃岳で噴石、降灰があり、森林、田畑、農水産物に被害がでました。

予想される現象：降灰・噴石・土石流・空振・火山ガス 等

### ② 規模の大きな噴火（200 年に 1 回程度起きるような噴火）

発生頻度は低いものの、防災上の対応が必要です。

- 1710 年～1717 年（享保元年～2 年）には、新燃岳で大きな噴火が発生し、広い範囲に火山灰が積もり、火砕流が発生しました。  
多くの家屋が焼失し、人的被害以外に森林・田畑に被害がでました。
- 1235 年（文暦元年）には、御鉢で規模の大きな噴火が発生し、広い範囲に火山灰が積もり、溶岩流、火砕流が発生しました。

予想される現象：降灰・噴石・溶岩流・火砕流・火口湖決壊型火山泥流・土石流・空振・火山ガス 等

新燃岳では、2008 年 8 月の小規模な水蒸気噴火から 2011 年 1 月の大規模噴火に至り、約 2 年半の火山活動で溶岩が火口内に溢れ、広い範囲に火山灰が積りました。

噴火の規模や気象条件によって危険区域の範囲は変わります。

各噴火警戒レベルにおける登山道および道路の規制箇所は現地での表示に従ってください。

溶岩流などの影響範囲は、想定する噴火の場所ごとに、次のように想定しています。

### 【えびの高原(硫黄山)周辺】

・表示している溶岩流、火砕流及び火砕サージ、火山泥流の影響範囲は、事前にどの方向に流下するか特定できないため、地形条件により可能性の高い 2 方向に流下した計算結果を重ねて描いたものです。なお、各現象の影響範囲は、過去の噴火実績 {溶岩流：2,300 万 m<sup>3</sup> (約 7,600～7,300 年前の不動池溶岩)、火砕流：1,300 万 m<sup>3</sup> (実績がないため類似事例である 1,716～1,717 年新燃岳享保噴火火砕流 Sm-KP7 を採用)、火山泥流：実績がないため噴火の影響が想定される不動池及び六観音御池における平常時の火口湖の水量に既往最大降雨を考慮した最大水位を採用} を基に想定しています。

### 【新燃岳】

・表示している溶岩流、火砕流及び火砕サージの影響範囲は、事前にどの方向に流下するか特定できないため、地形条件により可能性の高い2方向に流下した計算結果を重ねて描いたものです。なお、各現象の影響範囲は、過去の噴火実績（溶岩流：4,600 万 $m^3$ （約 4,900 年前の新燃両部池 B 溶岩）、火砕流：1,300 万 $m^3$ （1,716～1,717 年新燃岳享保噴火火砕流 Sm-KP7））を基に想定しています。

### 【大幡池】

・表示している溶岩流、火砕流及び火砕サージ、火山泥流の影響範囲は、事前にどの方向に流下するか特定できないため、地形条件により可能性の高い2方向に流下した計算結果を重ねて描いたものです。なお、各現象の影響範囲は、過去の噴火実績（溶岩流：4,600 万 $m^3$ （実績がないため類似事例である約 4,900 年前の新燃両部池 B 溶岩を採用）、火砕流：1,300 万 $m^3$ （実績がないため類似事例である 1,716～1,717 年新燃岳享保噴火火砕流 Sm-KP7 を採用）、火山泥流：実績がないため平常時の火口湖の水量に既往最大降雨を考慮した最大水位を採用）を基に想定しています。

### 【御鉢】

・表示している溶岩流、火砕流及び火砕サージの影響範囲は、事前にどの方向に流下するか特定できないため、地形条件により可能性の高い3方向に流下した計算結果を重ねて描いたものです。なお、各現象の影響範囲は、過去の噴火実績（溶岩流：2,400 万 $m^3$ （900～1,200 年頃の御鉢狭野溶岩）、火砕流：300 万 $m^3$ （1,235 年御鉢高原噴火火砕流））を基に想定しています。

※年代は火山災害予測図検討分科会検討時に参考とした文献による。